第14回夏期福音特別集会（３）

追求無限

――ピリピ書第３章――

１９６７年８月26日（御殿場）
小池辰雄

主に在りて喜べ　自己義認　変向変光　キリストの信による義　絶対無条件　唯だ一つを追求
原始の力　終末的追求　躓いても転んでも前進　我らの国籍は天にあり　主と同じ像に化する

【ピリピ3】

1 終に言わん、我が兄弟よ、なんじら主に在りて喜べ。なんじらに同じことを書きおくるは、我に煩わしきことなく、汝等には安然なり。
2 なんじら犬に心せよ、悪しき労動人に心せよ、肉の割礼ある者に心せよ。
3 神の御霊によりて礼拝をなし、キリスト・イエスによりて誇り、肉を恃まぬ我らは真の割礼ある者なり。4 されど我は肉にも恃むことを得るなり。もし他の人、肉に恃むところありと思わば、我は更に恃む所あり。5 我は八日めに割礼を受けたる者にして、イスラエルの血統、ベニヤミンの族、ヘブル人より出でたるヘブル人なり。律法に就きてはパリサイ人、6 熱心につきては教会を迫害したるもの、律法によれる義に就きては責むべき所なかりし者なり。7 されど曩に我が益たりし事はキリストのために損と思うに至れり。
8 然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思い、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥のごとく思う。9 これキリストを獲、かつ律法による己が義ならで、唯キリストを信ずる信仰による義、すなわち信仰に基きて神より賜わる義を保ち、キリストに在るを認められ、10 キリストとその復活の力とを知り、又その死に效いて彼の苦難にあずかり、11 如何にもして死人の中より甦えることを得んが為なり。12 われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉えんとて追い求む。キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。13 兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、14 標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したもう召にかかわる褒美を得んとて之を追い求む。15 されば我等のうち成人したる者は、みな斯くのごとき思を懐くべし、汝等もし何事にても異なる思を懐き居らば、神これをも示し給わん。16 ただ我等はその至れる所

に随いて歩むべし。
17兄弟よ、なんじら諸共に我に效うものとなれ、且なんじらの模範となる我らに循いて歩むものを視よ。18そは我しばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。19彼らの終は滅亡なり。おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地の事のみを念う。20されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。21彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて、己が栄光の体に象らせ給わん。

●主に在りて喜べ

感慨無量であります。なぜそうかというと、皆さんがこのピリピ書に、パウロが言っているように、

「みたまは一つ、心は一つ」

と、そういう境地に現実にいらっしゃるので、私はそれを眺めている。いや私自身もそのひとりです。なんとも、こういう兄弟姉妹たちといつまでもここにいたいなぁと、こういう気持で感慨無量です。明日はお別れしなくてはならない。まぁ、何が楽しいと言いましても、同信の兄弟姉妹たちと神を讃美するくらい楽しいことはない。まさに喜びのおとずれそのものを私たちがもって讃美する。人間の最もうるわしい姿は讃美である。

今日は、時間は制限されているけれども、有限の無限ということがありまして、有限の二時間を無限の時間に変えて、これに私たちはとっぷり入る。こういうわけであります。

第三楽章に入ります。第二楽章では、十字架のどん底に、私たちは主イエス・キリストと共に立たされる。どん底的存在となる。どん底的存在となったら、今度はこの山道を45度で登って行く。この祈祷会では、「追求無限」というわけです。

それで、パウロさんの言葉を読みます。

1終に言わん、我が兄弟よ、なんじら主に在りて喜べ。

これはもう、どの楽章においても、この

「主に在りて喜べ」

というキーノート（基調、主音）が時々響いている。実にすばらしいですね。

●自己義認

なんじらに同じことを書きおくるは、我に煩わしきことなく、汝等には安然なり。
2なんじら犬に心せよ、悪しき労動人に心せよ、肉の割礼ある者に心せよ。

ということは、すべてのユダヤ的な古きものが、皆これなんですね。犬というのは、ある

意味においては非常に我々には忠実な動物と考えられているが、聖書に出てくる犬というのは、キリストもあまり犬のことをよくおっしゃらない。ユダヤ人は犬が嫌いらしい。犬だとか豚だとか。狐とか狸だとかまむしとか。「まむしのすえよ」とか、「かの狐に言え」なんてキリストが言われた。ああいう動物はやっぱり悪い霊のお使いになるらしい。だから、狐にばかされたなんてのがあるわけです。イザヤ書56章10節に、

「斥候(ものみ)はみなめしいにしてしることなし、みな唖なる犬にして吠ることあたわず」（イザヤ56・10）

と、こういう悪いことが書いてある。徒党的なパリサイ根性。これは彼自身がかつてそうであったものですから。「肉の割礼ある者」、レビ記21章に出ている割礼のことですが、ユダヤ人が律法の上で非常に大事にしている割礼というようなこと。パウロはさんざんこのユダヤ的「割礼」に対して戦っているわけです。

3 神の御霊によりて礼拝をなし、キリスト・イエスによりて誇り、

「神の御霊によりて」というのと「キリスト・イエスによりて」というのは完全に同じことです。「よりて」というのは、むしろ「うちに在って」という言い方です。

「御霊に在って、キリストに在って誇り」

ということ。

肉を恃(たの)まぬ我らは真の割礼ある者なり。

「まことの洗礼ある者なり」というのと同じこと。いわゆる洗礼によりたのむな、まことの洗礼、聖霊のバプテスマを受けろ。形式のバプテスマは何にもならないと。

4 されど我は肉にも恃(たの)むことを得るなり。

生来の人間的ないろいろな血筋や伝統や才能や、そんなようなことはみんな「肉」です。

もし他の人、肉に恃むところありと思わば、

「他の人」とはユダヤ人です。

我は更に恃む所あり。5 我は八日めに割礼を受けたる者にして、イスラエルの血統(ちすじ)、ベニヤミンの族(やから)、ヘブル人より出でたるヘブル人なり。

彼は生粋のヘブライ人である。

律法(おきて)に就きてはパリサイ人、6 熱心につきては教会を迫害したるもの、

とうとう間接的な意味においては人殺しまでやってしまった。

律法によれる義に就きては責むべき所なかりし者なり。

まさに立派な、宗教的な信仰的な道徳的な在り方をしていたと。ところが、こういうパリサイ根性が、キリストがマタイ伝7章でおっしゃっているように、

「おのが目の中にあるうつばりが見えないか」

ということ。おのが目にあるうつばりは「自己義認」のパリサイ根性です。そして、人の目の中のゴミを見て、「お前、ゴミがあるじゃないか」なんてなことを言う。ところが、自

分の目の中のうつばりが見えない。これが自己義認の非常に悪い角度なのであります。これをパウロ自身がやっていた。それが「律法の義」というもの。

●変向変光

7されど曩(さき)に我が益たりし事はキリストのために損と思うに至れり。

ユダヤ教に熱心であって、おおいに自分にとって誇りとなり益となったことは、キリストの故にマイナスだと思うに至った。とんでもないマイナス。

8然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの

この「知る」というのは霊知です。キリスト・イエスを本当にみたまをもって知ることの、

優れたるために、凡ての物を損なりと思い、

これはみんなマイナスであると思うと。なんか損得というような感じを受けるような損という意味ではない。

彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥(あくた)のごとく思う。

凡ての物を失ったが、之を塵芥(あくた)のごとく思う。こちら側は人間の、神との関係が断絶されると、どんなにそれが良きものであっても、これは結局滅びである。そして、これをちりあくたとしてしまったと。反文化ですよね、ある意味において。もっぱらキリストです。そういう意味において自分というものを、また自分のなしたことを、知識やみんなそんなものは塵芥(ちりあくた)だといって否定してしまった。

けれども、私たちはもちろん、神さまに造られたものですから、体力であろうと、知力であろうとも、また、感情の豊かさであろうとも、道徳的な立派さであろうとも、何も悪くはない。みんなそれ自体は悪くはない。悪いのは、どこが悪いかというと、中心がわるい。この中心が悪いものだから、これがみんな赤くそまってしまう。この中心の色の元になるこの赤を変色させなくてはいかん。この「自我」という中心が悪いものだから、すべての賜わったものがみんな悪くなってしまう。それ自体はまことに結構なのだが、実はそれがマイナスで、これを塵芥とした。

ところが、上から来て、これが変質された。「十字架と聖霊」でもって変質されて、黄金色になる。光をおびた色になる。天来の光を持った天光色になる。そうすると、このちりあくたが、また変質してしまって、すばらしいことになる。これがだんだん光を持ってくる。こういうことですね。

キリスト教は――「キリスト教」という言い方はあまり好きではないけれども――福音は徹底的なまず否定であるが、そうかといって、もう祈り三昧で入ってしまって、反文化で山にこもってしまって、そんなのは決して福音ではない。中世の修道院は、また深い意味で文化的な役割を大いに担ってはいたけれども、いわゆる山にこもってしまったような意味の生活は決して――今の「トラピスト」なんてのもありますが――あまり私は感心し

ない。そういうことではない。

「与えられたるものにして良からざるなし」

とキリストは言った。食物でも何でも、すべて良からざるはなし。いわんや、我々の与えられているすべての才能、これは決しておろそかにしてはいかん。身体自身もそうである。これは中心がすべて別のものになる。今度は、上から来たこの天光色のものに変わる。これが「十字架・聖霊」によっての変質変貌、変向変光ということ。

●キリストの信による義

9 **これキリストを獲、かつ律法による己が義ならで、**

律法を一生懸命、外側から拳々服膺（けんけんふくよう）するような、そんな義ではない。これはユダヤ人にとっては大きな躓きで、今でもこの躓きをユダヤ人はやっているわけですよ。とにかく七面倒くさいいろんな律法がある。その点では、全くユダヤ人は頑固な民だと思う。こんな素晴らしい、本来、ユダヤ教のチャンピオンがかくも変ったということを、どうして今のユダヤ人が受けとらないのだろうか。ユダヤ人の回心が本当になれば、ここに驚くべきことが起こるだろう。これはパウロがロマ書12章、13章あたりから言っているところの事態であります。

唯キリストを信ずる信仰による義、すなわち信仰に基きて神より賜わる義を保ち、

「キリストを信ずる信仰」と書いてあるが、こう訳したって、まんざら間違いではないけれども、直訳すると、

「キリストの信仰」

と書いてある。「キリストの信仰による義」。もちろん、その「キリストの信仰」という言い方の「の」が、二格的な「の」が目的の意味を持つ場合ももちろんあります。これもその意味にとったからそう訳したんでしょう。「を信ずる信仰」と。けれども、それをもう一つ掘り下げれば、「キリストの信」、キリストの持っていらっしゃるその信、キリストが神さまに向ってあられたその信。その信によって。その信を受けとることが信仰。「キリストを信ずる信仰」ではなくて、「キリストの信を受けとる信」です。

「キリストの信によって義とせられる」

と。この「キリストの信」というのは、もちろんこの「キリストの信を受けとる」ということがこちらの信仰でありますから、それが二重の構造になって――「信ずる信仰」で訳としてはまちがいではないでしょうが――その「信ずる信仰」の奥に「キリストの信」というもの、これをしっかりとむしろ自覚したいと思うわけです。バルトなんかはその角度で解釈しているわけですが。

「すなわち信仰に基きて神より賜わる義」ということは、

「**アブラハムは神をまこととした**」
ということが「信ずる」ということ。
「**神さまはこれを彼の義とした**」
と、創世記15章にあるとおりです。
「神をまこととした」
ということは、
「自分はだめだ」
ということ。神に対して「然り」ということは、己に対しては「否」ということ。我に対しては否。
「自分の今までの義なんてものは否！　キリストの義こそまこと、然り！」
と言ったのが、これが信仰ですから。パウロは、
「**これを塵芥と思う**」
ということは、これを全的に否定したということ。全的に否定したということが、「塵芥と思う」ということ。
「己を全的に否定したら、神さまは義と言った」
と。そうしたらば、その中に「キリストの信」が入って来て、それが彼の信仰の土台となった。「キリストの信」とは、具体的にいえば「御霊」のことです。そうしたらば、これが変質変貌してきますから、今度は、いただいたものがみんな神本位に働く。キリスト中心に働き出す。中心がキリストですから。御霊のキリスト、キリストの御霊が中心で動き出す。
「義を保ち」とは――「義」という言葉を「正義」とかなんとか固苦しくおとりにならないように――「神を然り」とし、「聖意を然り」としている事態が「義」です。その内容は無限であります。

●絶対無条件

10キリストとその復活の力とを知り、11如何にもして死人の中より甦えることを得んが為なり。

復活の力がなぜくるかというと、御霊がくると、御霊は命があり、力があるから。絶対にこれは生命であり、力である。光であり、力であり、生命であり、愛であり――何といったっていいですが――自然にそういうことばが出てくるわけです。復活の力という。
「自分は自己を否定してしまったら、よみがえってしまった」
という。復活は、現実に私たちにおいて現に生ずる事態です。
「何かしらんが、自分の中に、今度の集会では力が入った」
と、どなたも。淋しくないですよ、そうなったら。何か、その人が輝かしく内側から底光が発してくる。その底光の人になってください。底力、底光というやつ、復活の力という

のはね。みたまの人は、どん底の底、十字架の底だ。私たちはこの底力、底光の人にならなくては。ここはどん底のどん底、谷底だから。谷底に行かなければ、本当の清水に出くわさない。

「鹿の谷川の水を慕いあえぐが如く我は汝をしたいあえぐ」

の詩篇42篇であります。

又その死に效(なら)いて彼の苦難(くるしみ)にあずかり、

「その死にならいて」ということは「その死に同化して」という言葉。その死に同化してしまって、彼の苦難にあずかる。「主にのみ十字架を負わせまつり」（讃美歌331番）ということで、その苦難にあずかる。

たとえば、ペテロ前書4章は大事なところですね。12節、

「愛する者よ、汝らを試みんとて来(きた)れる火のごとき試煉を異なることとして怪しまず、反ってキリストの苦難にあずかればあずかるほど喜べ、

ここでも、ペテロは「喜べ」と言っている。

なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。

もう、ペテロといえども、パウロといえども、同じみたまの中からものを言っているから、言葉が相照応するわけです。

もし汝等キリストの名のために謗(そし)られなば幸福(さいわい)なり

「もし汝等キリストの名のために、クリスチャンよりそしられなばさいわいなり」

と。パリサイ・クリスチャンよりそしられて幸いである。

栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり。」（ペテロ前4・12～14）

「栄光の御霊」とはいい言葉だね。

「栄光の聖霊が宿ってくださるから、患難何ものぞ。聖霊わが内に宿り給わば、我ら何をか恐れん」

と。こういうわけで、苦難をもなお喜ぶ。こういう盛んなるのは、単なる忍耐とかなんとか、やせ我慢しているのとは違う。

信仰の世界は、いつも申し上げているとおり、「現実」（ヴィルクリッヒカイト）であります。現(うつつ)の世界。思われている世界ではない。一番すばらしいものは、絶対無条件に、直ちに今ここで、受けとれるものであります。最高最深なるものは絶対無条件なものである。私なんかもういつぶっ倒れたって心配ない。

そういうわけで、なんとペテロもまた盛んなるかな。ペテロ前書4章13節。まぁ、キリストと一緒にいたペテロは、キリストと一緒だからいいかと思ったら、とんでもない話だ。だめだ。躓きころんで、とうとうキリストを否んだ。キリストの袖ひきとめて、

「サタンよ、しりぞけ」

なんてやられてみたりね。けれども、これが一旦ペンテコステを経過して、御霊が彼の中に入るや、使徒行伝前半のペテロはなんと素晴らしいではないですか。

「我を見よ。我が内にあるキリストを見よ」

ということになる。

●唯だ一つを追求

神の民のひとつの特色は、何らかの意味に於いて、苦難を負っているということです。苦難を負わざる生涯は本当の生涯ではない。仕事でも、どのような発明家であろうとも――エジソンでもそうです――さんざん失敗している。また、学者であろうとも、どのような事業家であろうとも、惨憺たる歴史をみんな持っている。苦難を通している。芸術家もそうです。

ベートーベンも、とうとうつんぼになってしまった。自分の作曲した音楽は、１８００年以降のものは聞こえない。終りの25年間は殆んど聞こえない。私はドイツのボンのベートーベンハウスに行って、まぁ大きなラッパみたいな補聴器をじっと見ていて、すごい人だなぁと思った。

「皆が自分のことを何と言おうとも、私の心の中には深いある一つの熱がある」

と言っている書簡があります。人に対する本当の愛の心です。

「自分の音楽は、世の苦しんでいる人たちのために献げるのだ」

と。ベートーベンは、一遍はドナウ河に身を投じようと思って、遺言状まで書いた。思い留まったのは、この「クンスト」「音楽」のために。これを世にささげると。

グリルパルツァーの、ベートーベンの記念碑を建てた時の除幕式の時の有名な演説がある。

"Nach Einem trachtend,
Für Eines sorgend,
Um Eines duldend,
Alles hingebend für Eines,
So geht dieser Mann,
Durch das ganze Leben hindurch."

「唯だ一つのことを追求しながら
唯だ一つのことに心をもちいながら
唯だ一つのことのために耐え忍びながら
一切を唯だ一つのことのために捧げてしまって
そのようにしてこの男は全生涯を貫いていった。」

という句であります。非常に力強い句。やはり「一つ」なんです。我々の人格体はみな一

であります。一なる人格体が二つのことはできない。生涯を通して、なるほど多という面は持っている。多面という面、多角という角度は持っている。けれども、その中心はたった一つ。ベートーベンにとっては、それは音楽であった。レンブラントにとっては、それは絵画であった。みなそういうことです。

「患難を通して歓喜へ」
"Durch Leiden Freude"

と、彼の手紙の中に書いてある。

ダンテもそうです。19年間流浪の旅をしながら、あの『神曲』を書いた。19年間旅をしながら。これも「ただ一つの事」を中心として動いていた。そして、その苦難の悲劇を、彼は「喜曲」「コメディア」(commedia) と言った。あとから、ボッカチオだったと思いますが、これに「ラ・ディヴィナ」「聖なる」を付けて、「ラ・ディヴィナ・コメディア」「聖なる喜曲」と言った。ベートーベンも死に際に、

「友たちよ、喜んでくれ。喜劇は終った」

と言った。

●原始の力

そういうような具合で、パウロも、もうキリストにとっつかまったら、後はひたむきに、パウロにとっては、「ただ一つの事」は伝道であった。「地の果てまでも」という、当時の地の果てはイスパニヤ。西の果てイスパニヤに向って――ローマはまだ途中ですよ――更に向かおうと思ったが、途中でもってローマで仆れた。彼の魂は、イスパニヤどころではない、ついに全世界にまで及んでしまった。パウロの福音は地の果てまでも、世の末までも向って行く。なんと盛んなる追求の姿が時間空間を通して展開して行くことでありましょうか。

これがこの「復活(よみがえり)の力」が彼の中に本当に働いていた。皆さん、あなた方一人一人の命はその小さな五体の中に――原子力なんていって、普通の原子力に驚いてはだめですよ。今は原子力時代なんて言っているけれども――我々のは原始力、ウルクラフト（Urkraft）です。この「原始」はキリストですから。キリストという原始人、原始体。キリストという原始の力が我々の頂いたこの御霊です。御霊を頂かないで、

「聖霊をいただくことなくして、何ぞキリストのものなるや」

とパウロが言ったとおりで、もうはっきりしている。それでないような、頭のクリスチャンだとか、であるかの如きクリスチャンなんてものは、もうよした方がいい。それよりか、何もない方がいい。

この神から「賜わりたる義」。「義」とはキリストである。ロマ書3章にも書いてある。

12 **われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉(とら)えんとて追い求む。キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。**

これをちょっといいかげんに読んでもらっては困る。

「まだ全うしたというわけではない」

と。もちろんそうです。まだ未完成です、パウロといえども、ヨハネといえども、ペテロといえども。けれども、

「追求するのだが、キリストが私をつかまえてしまった」

と。ここが普通の努力精進と、普通の浪漫主義や理想主義と違うところです。

「キリストにつかまえられて、キリストの霊が、みたまがこの中に入ってしまって、原始力がここに来た」

と。だからパウロの追求は、山登りはどん底から、十字架のどん底に立って、ここで清流の真清水を飲んで、キリストの聖霊の水を飲んで――この水は渇かない。腹から泉の如く湧き出づるところの命をいただくから――この山をぐんぐん登って行く。この原動力は、すでに捉えられてあるから、いよいよ追求して止まない。

「私はキリストに捉(とら)えられたから、もういいです」

なんて言っていたら、それはどこか他のことになってしまう。そんなこと言って安じていたら、ちょうどよどんだ水みたいに、たまり水になってしまう。

そういう原動力があって、追求する姿です。

「すでに救われた。故に我々はいよいよ救われて行こう」

という。「救われるために」ではない。

「すでにあがなわれてある。故に、いよいよ贖いの実(じつ)を示して行こう。すでに捉えられてある。いよいよ我々は捉えて行こう。追求して止まず」

と。それはキリストに向って。

私はこんなしょうがないやつだが、この中に聖霊が来たから、追求して行くというと、だんだん減らないで大きくなって――地上では満月に、球体にならないけれど――天上に行ったら、これは満月に、球体になってしまう。転がればころがるほど大きくなる雪だるまみたいなものだ。霊的酵素が入ったから、ふくらがる。

これが、いわゆる浪漫主義やいわゆる理想主義とちがう。いわゆる現実主義でもない。およそ人間の思想が持っている「イズム」では、福音の世界はつかみ切れない。福音はどれもこれもみな持ってますよ。みんな持って、渾然と一つにしてしまって、ぐっとつかんでしまう。それは最もすばらしい浪漫主義であり、最もすばらしい理想主義であり、最もすばらしい現実主義である、もし主義というならば。

●終末的追求

そういうものを福音は持っている。なんとなれば、ここにみたまの現実があるから、これがものすごい勢いで追求して止まない。また、その力をもって事実進んで行く。

神からいただくこの最もすばらしき霊的中心を持たずして、いくら青年が力んだってダメだ。

「そんな上からの恩寵なんてのは意気地がない。おれたちは大いに頑張ってやって行こう」

なんて、まぁやってごらんなさい。始めは勢いがいいけれど、しまいにくたびれてしまって、放物線みたいにおっこちてしまう。

福音は、こっちから降りて来たんだから逆に登って行く。方向が反対ですから。谷底に降りたものは、今度は逆に登らざるを得ない。地面から発して

「よし、おれはひとつやってやろう」

なんて、登ったような気になっているけれど、また、おっこちてしまう。そういうカーブの差になってしまう。

私たちは恩寵にただ安じているんじゃない。絶対の恩寵がすばらしいから、いよいよ追求してやまない。これが、もしドイツ語で表現するなら、「エスカトローギッシェル・ドラング」とでも言いたい。「終末的な追求」です。終末的現実をいただいているから、終末に向って追求して、そして、この終末的追求の実存は、神の国を呼び寄せる。

「御国を来らせ給え」

と祈るものは、この終末的追求をもって展開して行かざるを得ない。

「我は今日も次の日も進み行くなり」

とキリストは仰った。

これが第3章の中心の事態で、「追求無限」は「終末的追求」という内容を持っている。その終末的追求であるゆえんのものは、現実に今、私たちは終末的現実として、神の国を、神の現実を、復活の生命力を、キリストのいのちをいただいている。天国体として既に内側で成っている現実があるから、いよいよ天国に向って進んで、自分自身がいよいよ天国体となって行く。もう非常にはっきりしています。もう何が来たって突破してしまう。パウロがあのいろいろな艱難にあって、

「為ん方つくれども希望を失わず、倒さるれども亡びず」

とは、この追求なんだ。コリント後書4章に、

「我らこの宝（キリスト）を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして神より出づることの顕れんためなり。われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失わず、責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。」（コリント後4・7～10）

常に十字架を負っている。それゆえに、

「イエスの生命の我らの身にあらわれん為なり」

と。なんとさかんなる言ですかね。パウロも書簡を書きながら楽しかったろうと思うね。こういうすばらしい文句が上から湧いてきているから。考えてなんか書いてやしない。研究なんてことで、パウロさんのこの驚くべき御霊の迫りで以て書かされた文字が、読めるかっていうんだ。

●躓いても転んでも前進

よみがえりの生命、聖霊の復活の力。ロマ書6章1節から11節、8章11節、コリント前書6章14節あたりがマッチするところの節であります。このような追求をして更に行きますと、

18そは我しばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。19彼らの終は滅亡なり。おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地の事のみを念う。

十字架に敵して歩むところの、ギリシアの密教もありますし、ユダヤの律法的な宗教もありますし、今と同じです。さまざまな事態が生じているわけです。けれども、これに対しては敢然と十字架をもって戦う。

涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。
19彼らの終は滅亡なり。

と。どんなにそれが今、霊的で良さそうに見えてもだめだ。十字架抜きの世界はだめだ。人間が思い上ったら、とんでもないことになる。

おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地の事のみを念う。

私たちにとって恥ずべきことは何かというと、躓いたり転んだりすることじゃない。この原動力をいただきながら、前進しないことが恥である。躓いても転んでも、倒れても滑ってもいい。絶対に後退しない。

「神さま、申し訳ない」

と言って前進できている。

「あの人はどうだ、この人はこうだ」

なんて言っている人は後退しますよ、そういう人は。人間のことを品さだめしている人は後退する。

「さあ行きましょう」

と言って、互いに本当に――十字架で赦された人じゃないですか――赦しをもって担いながら、助けながら、手を引っぱりながら進む。それはできる。そういう人は本当の前進です。

13兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、14標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したもう召にかかわる褒美を得んとて之を追い求む。

上から来る召(めし)であって、人間からくる褒美ではない。上から来る冠、永遠の生命、義、愛、栄光。こういう冠を上からいただく。この追求だから、嬉しくてしょうがない。しかも、それは自分ひとりが先に立って、なんていうことじゃない、みんなと一緒に行きましょうと。

どうぞ、私なんてものは問題じゃないですから、皆さん。私は63歳になってやっとこんなところに来ただけのはなしです。皆さんはまだ20歳の、30歳のという。どんどん進んでください。私はしんがりですから。しんがりで、

「後なるものは先」

だから、あなた方は。「後なるものは先」でどしどし先に。どうぞ、「お先に行きます」と言って先に行ってください。私はしんがりから行きます。しんがりから行くけれども、私はとにかく天国の門が閉じる一番あとから入るかも知れないけれども。皆さんを後から祈りで押して行くからね。地上に御用のある限り、私は死なないです。

まぁこんなやつをつかまえて、神さまは偉大な真理を啓示し給う。パウロが言っている通り、

「このキリストを知ることの優れたるために」

とは、優れたるキリストの知が、

「キリストという驚くべき知が、私たちの中に入って来たから、このために犬死はできない。ただじゃ死ねないぞ」

というわけです。

どうぞ、皆さんは何をなさっていても、質的にすばらしい、その人でなくてはできない課題を担っている。祈りなさいよ、示されますから。そうして、行きなさいよ。人生、本当の成功という人生は、勝利という人生はそこにある。人間の評価なんかどうだっていい。さっきの詩篇139篇の如く、

「神知り給う」

「キリスト知り給う」

と。このキリストの評価、「よし、お前は」というので行ってくださいよ。ほほえんで行く。ほほえんでこの地上から去って行く。

まぁ世の中には、偉そうなことや、良さそうなことや、幸福そうなことや、もういろんなことがたくさんありますよね。みんな泡の如く消えて行く、しゃぼん玉のように消えて行く。

「なんとかして、この日本の国に神を、この福音を伝えないではいられない」

とやりましょう。数はいいですから、百人いいかげんなクリスチャンを作るよりも、たった一人の本ものを作った方がいい。だから、

「今年一年間かかって一人の人を本当の世界に入れさせるように私を使ってください」

と、神さまに祈って進んでくださいよ。それが本当の伝道だから。

●我らの国籍は天にあり

そういうことで、

「もう人生が嬉しくてしょうがなくて、掛け替えがなくてしょうがなくて」

ということでしょ。だからパウロは、そこで何と言っているかと言うと、

20 **されど我らの国籍は天に在り、**

我らの国籍は天にあり。我らは天国人である。天の市民である。その国籍は天にある、その天はすでに地上にある。汝らのうちに天国がすでに来ている。しかも、終末の天国が待っている。

我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。

再臨を待っている。再臨に向って追求して止まないところの終末的追求であります。人生は進みて止まず。私はいつ倒れるか知らんが、なお進んでいる。死してなお止まずという。死してのち止むじゃない。死してなおのち止まずという。

ロングフェローの「人生の歌」の中に、

「人生は真実なり、人生は厳粛なり。
墓穴いかで終結ならんや。」（私訳）

とある。

また、ブラウニングの「ラビ・ベン・エズラ」という詩の中に、

"Grow old along with me!
The best is yet to be,
The last of life,
for which the first was made:
Our times are in His hand,
Who saith "A Whole I planned,
Youth shows but half; trust God:
see all nor be afraid!""
(RABBI BEN EZRA by Robert Browning)

「老い往けよわれと共に！
最善はこれからなり、
人生の最終のためにこそ
我らの時期々々は創造れし。
彼は宣へり、
『全期（全的なもの）をわれは目論めり、

青年の相は半に過ぎず、神に信頼せよ、
一切を達観して懼るる勿れ！』」（私訳）

という句がある。

「私と一緒におおいに歳をとれ」

というんだ。このブラウニングというのは積極的ですからね。普通の人は歳とると、数を数えるのが嫌だけれども、大いに数を数えながら進んでくださいよ。私も63だけれども。

「最善がまだやって来るんだ」

と。こういうところがブラウニングの魂なんだよね。まだあらんとしているところのもの、あるべきところのものが今でもなおあると。

「この人生の終局、終わり、目的のために、最初が、初めがつくられたのである」

初めというものは終わりのためにあると。

「我々の人生の各時期というものは、諸段階というものは、彼、神さまの手の中にある。

キリストの手の中にある。

「『全的なものを私は計画した、
青年はまだ半分に過ぎない。神さまに信頼せよ、
一切を見よ。懼れることはないぞ！』」

と。そういうように盛んに追求して止まない。

「年を取るなら大いに年を重ねて行け。いよいよ無限の追求で、ここでおしまいなんていうところはない。地上の生涯なんてものは序の口にすぎない。我々はすでに永遠の生命者じゃないか」

というような調子の盛んなる句であります。これがやはり終末的追求の魂のブラウニングの告白が、ここに表われている。パウロの追求と同じような気持を表している。

●主と同じ像に化する

それで3章の最後にこういう句がある。

20 **我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。**

「マーラナタ」、再臨を待つ。手をさしのべて待っているという意味です、この「待つ」という言葉は。

21 **彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、**
我らの卑しき状の体を化えて、

いいですか、ここにもある。このデュナミスによって、力によって、

変質させてしまって、

己が栄光の体に象らせ給わん。

我々の目的は、霊肉渾然としてついにキリストの姿に、栄光の姿に変えられる。これはパ

ウロがコリント後書3章17節で同じようなことを言ってます。

「**主は即ち御霊なり、主の御霊のある所には自由あり、我等はみなかおおおいなくして鏡に映るごとく、主の栄光を見、栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像（すがた）に化するなり。**」（コリント後3・17～18）

内側に御霊という霊核があるから、ついに栄光体に化していく。そうでなくて、いくら追求したって化しはしませんよ、そんなものは。だから、すでに私たちはそのように内側から本当にとらえられてしまったから、追求して止まない。追求せざるを得ない。爆発するような命が来たのだから、これは動かざるを得ない。クリスチャンなんていって、モタモタしているのはクリスチャンでもなんでもない。

キリストがマリヤを褒めてマルタをけなしたように考えているが、あれは、マルタはあの時、

「**マリヤも一緒に働くように言ってください**」

なんて、あんなことを言うからキリストにやられてしまう。そんなこと言わないで、黙って一生懸命に働いていれば、

「よし、お前もよく働いてくれた」

と、そう言われるに決まっている。マリヤとマルタと両方持っていなければだめだ。いい意味におけるマルタもマリヤもどっちも持っていなければ。マリヤとなってこいつをつかまえて受けとったら、今度はマルタとなって展開して行く。静動あわせ持っている。静中の動、動中の静というような、マリヤ即マルタ、マルタ即マリヤというような――そんなことを言うやつはないでしょう――そういうようなのが、我々、東洋的な本当の把握の仕方なんです。もう、ぐわっと持ってしまうです、両方とも。真理は、片一方だけで、

「これか、これでないか」

なんてやっているんじゃない。

そういう一如の把握をした自在なるところの在り方、それが本当の追求なんです。全部がある。だるまさんみたいに動かないでいる。しかしながら、だるまみたいにただ動かなかったらダメなんだ。これはまた、ひとたび動き出せばものすごく走り出す。これがこの使徒的実存なんです。パウロの実存、ペテロの実存、ヨハネの実存はみなそういうようなものを持っている。なんと盛んなるかな、福音の世界は。

かくして、私たちは追求して、ついに山頂に来た。ダンテと同じように煉獄の絶頂に参りました。明日はどうなるか。今日はこの絶頂の、山頂の祈りをこれからしようと思う。